

# 世界の流れに呼応してー 「平和への権利の宣言」国連総会採択を受けて

飯高 京子

昨年 2016 年 12 月 19 日、国連総会は「平和」を権利として認める宣言を採択しました。これは日本国憲法前文の「平和的生存権」と共通する考え方が、ようやく世界的な流れとなったものです。一方、昨年度の欧米諸国では「想定外」の動きが次々と生じました。自国の利益を世界諸国との協調より優先する主張が、いわゆる民主主義国家の選挙で多数を占めました。わが国政府は自国民の声よりも重きを置く米国の次期大統領の非公式発言にふりまわされ、その結果を受けて株価の変動に一喜一憂しています。

上記の採択を受けて、1 月 12 日青山学院大学で開かれた集会へ軍隊を持たない国コスタリカから、ロベルト・サモラ弁護士が参加しました。彼はコスタリカ憲法は軍隊を持たないとあるだけだが、日本国憲法はその前文で「世界市民が平和に生きる権利」を示し、9 条では「戦争の永久放棄」を誓う。実に素晴らしい。自分が一人でコスタリカの人権教育運動を始めたのはこの日本国憲法を読んだからだ、と改めてその意義を強調しました。ただし、彼の国は徹底して国の予算を軍事ではなく平和利用に用い、小学校低学年から人権教育を実施する。憲法裁判所は国民の人権を守るために老若男女を問わず誰にでも開かれている、と報告。それを聞き、私は日本国憲法前文と 9 条を読み返し、改めて先人の明に感銘を受けました。憲法前文の後半には以下が記載されているからです。「われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであって、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは自国の主権を維持し、他国との対等関係に立たうとする各国の責務であると信ずる。(略)」

第一次世界大戦が勃発し、各国が互いに武力で争う殺し合いを止めようと若者達の祈りから国際友和会が 1914 年出発したように、2017 年現在、時代に逆行した一部の国の流れを押しとどめる世界多数の国の連携と協調が始まったのではないのでしょうか。その出発点は、昨年末の国連総会で多数の国々が、米、露、中国などの軍事大国とそれに追従する日本国に対し、「軍拡戦争で人類滅亡に追い込むのはもう沢山！」と STOP をかけたのです。

日本国憲法は 71 年前に敗北したわが国が数千万に及ぶ犠牲者への贖いとして世界に「戦争放棄」を誓いました。そして国民は再び政府の言いなりになって戦場へ駆り出されない。政府ではなく国民に主権が存在することを宣言しました。これらの事実を無かったことにして「戦後レジームの復活」を目ざすのなら、まず日本国憲法の前文を読んで下さい。現在、わが国は憲法よりも日米軍事同盟を優先し、沖縄県民の圧倒的多数の声を無視して新たな軍事基地の建設を強行しつつあります。そして非暴力で訴える国民を公務執行妨害で逮捕・勾留し、特に発言力のある人は何度もこじつけの理由で再逮捕して釈放せず、工事の完成を急いでいます。毎日、おにぎりを持参し座り込み抗議に出かける沖縄県うるま市の石原艶子さんからは、悲痛な声の電話で、「何故沖縄がこのような差別を受けるのか」と問われます。「平和に生きる権利」は苦しみながら必死で訴える沖縄の人々の当然の権利です。彼らの生きる権利を認めようと国連総会で採択されたのです。自分達の思い通りにならない沖縄県民を不当に扱う日本政府の傲慢な態度に、私の中に強い憤りと怒りが湧いてきます。彼らの為に導きと和解の智慧を示したまえと祈ることは難しく、苦しい思いの日々が続いています。

沖縄の抵抗運動支援中の非暴力平和隊理事大畑豊氏が、最近、短期間帰省し報告会で映像と話が

ありました。彼は座り込みの最中に警察車両がバックして危うくひき殺されそうになり、周囲の人々の叫び声で車は止まったものの、彼の怪我の状況を調べもしないですぐに立ち去りました。抵抗の意思表示をして警官の乱暴な取り締まりにより怪我を負わされた他十数名も一緒に訴訟を起こしたが、大畑氏以外はすべて却下。彼は現在、国の暴力の非を訴え訴訟中とのことでした。「非暴力抵抗は弱腰でないのか」との質問に対し大畑氏は、暴力に暴力で立ち向かうことは何の解決にも結びつかない。伊江島で米兵に家や田畑を焼かれた時、阿波根さんは米兵が進駐してきたきっかけは日本が戦争を始めたからだ。戦争が悪いのだ、と述べたそうです。右翼の人達が彼を脅しにやってきた時は「まあ一服」とお茶をすすめ、彼らの話をじっくり聞き、最終的には和解して彼らを送り出した。こうした阿波根さんの、相手の人間性を信じ尊重した対応例を引用し、大畑氏は自分もこのような実践を努力中と応えました。

友和会は非暴力の精神で紛争を和解へ導こうと取り組んでいます。最近、国家権力がこのように逮捕権を乱発するとき、若者にどのように伝えればよいのかと真剣な悩みを訴える声や、逮捕された人々をどのように励ましたら良いのかと悩む問いかけがあります。戦前のような治安維持法が復活するのではとの危機感も大きくなっています。友和会の会員は自らの決意に基づき、非戦・非暴力の平和団体に参加しました。会員一人ひとりには内なる声を聴き、個人として決断する以外の道はありません。友和会は会として指示はしません。われわれは赦しと愛の奥深さを示され、生かされていることを感謝しつつ、共通の目標へ向かって今年度も共に歩ませたまえと、ひたすら祈り求めます。

